

⑩ 月渡り

沢は昔、月渡りと呼ばれていたそう。河内へおいでになった近衛中将隆澄さまが、帰りに沢でお泊りになって、月を見て天子の恩を偲び、付き添いの人に和歌をよみあげられた。

「月渡りの月見る度に思うかな 沢のみやこの光あまねし」と。

また、この近辺に鉱物がかならずあると信じて、九条道家さまがこられたが、なかなか見つからなかった。都を思い、

「さてもよき月渡りの月いま思

う 都の月は雲はれて来し」

とよまれたんやと。

また、上沢のことを江戸時代には日方村というたが、今でも日方という人がいる。河内から見ると、沢は



日当たりがようて、あったかいからや。

上沢のお宮さんの神様は、もとは河内のお宮さんの神様もかねていらっしやったので、河内に来たり沢に行ったりしていなさったんやと。

ところがある時、夢のお告げで、

「わしは、もともと日方が好きじゃ。今後は決して陰には行かぬ。」

と言われたそう。それから沢だけの神様になられた。

そして、よその神様は毎年十月には出雲参りをされるのに、沢の神様だけはお参りなさらないらしい。

⑪ 善祐寺の阿弥陀如来さま

沢の善祐寺は、一乗谷の朝倉氏と縁のある古いお寺での。初代敏景の子の道景がたてたんやと。

本堂には阿弥陀さまの像が二つもあって、一つは秘仏での、盆と正月におがませてもらえるんや。道景がお父さんの敏景にもうったもんで、ぶっくらとやさしいお顔してなはっての。なんでもあの有名な恵心僧都がつくられたんやと。ざっとこのお寺を五五〇年も見つけていなはるんや。江戸時代の中ごろ、どろぼうがこの阿弥陀さまをぶろしきにつつんで、おぶって下の方にげたと。するとの、急にねむとうてたまらんようになって寝てしもうた。背中がぞくぞくして、気がつくともう朝で、はっとしてあたりをみまわしたら、なんとまだ善祐寺の境内にいたんやと。「りや仏さまのバチがあたったんや。早う仏さま返さんと。」

どろぼうは、からだがふるえて止まらなんだ。  
「阿弥陀さまのバチがあたってしもうた。ごえんさん、どうかゆるしておくんはい。」  
と、たたみに頭ごすりつけてあやまったと。

ほれから、またずっと時がたつて……  
ある時ごえんさんが、右手が痛くてたまらず、阿弥陀



さまも、

「痛い、痛い。」

とおっしやる夢をみた。へんやなあと想着、本堂の阿弥陀さまを見にいったら、右手の人差し指が落ちてのうなっていたんやと。

⑫ 三社森

尾花の石碑あたりから沢の田んぼにかけては、昔は三社森っていうての、何百年、何千年もたった木がからみおうてて、鳥やけものが住む、昼でもうす暗い大きな森やった。なかには、まわり三尺もある太い藤づるが大木にまきついていたのもあった。村人は、この白藤の花をながめながら、田んぼ仕事に精をだした。森の中に入ると姿も見えん、声もきこえんで、弁慶がこそつといくさの相談したこともあったんやと。